

第44回中学生人権作文コンテスト

兵庫県大会

最優秀賞

自分らしく生きる～祖父から学ぶこと～

姫路市立城山中学校 2年 藤本 莉乃

去年の秋、私の祖父は亡くなりました。原因は癌でした。手術をして一年以上が経ち、元気になってきたかと思っていた矢先に転移が見つかり、末期だと告知されてからは、あっという間の時間でした。

お盆に会いに行った時は、想像していたよりも元気で、私や妹に会うととても嬉しそうにずっとしゃべっていました。でも、十月に入ると一気に弱って歩けなくなり、息も苦しくなってしまう、入院することになりました。

祖父は、もう積極的な治療はしないと決めていたため、入院先は緩和ケア病棟でした。緩和ケアとは、苦痛を伴う処置は行わず、身体的な痛みや精神的な苦しみを減らすことを目的とした看護のことです。

私は入院してから数日後、祖父に会いに病院へ行きました。いきなり会いに行ったら喜ぶかな？身体が心配な気持ちも抱えつつ、ドキドキしながら向かいました。しかし、病室に入り祖父の姿を一目見て、涙がこぼれそうになりました。

目に映ったのは、もう骨と皮だけの、やせ細ってしまった祖父の姿。食事もほぼとれなくなり、あまりにも変わり果てたその姿に、泣かないように必死に耐えることで精一杯でした。私は涙をこらえて、頑張って声を振り絞り、「おじいちゃん！」と呼びかけました。祖父は、私達の姿を見て「おお、来てくれたんか。」と嬉しそうに言ってくれました。私達は看護師さんをお願いし、祖父をベッドごと移動させ、一緒に中庭で空気を吸い、日光にあたりました。祖父はとても嬉しそうにずっと長い間外にしようとしていました。夕方になると、祖父は私達が帰らないように「まだおりよ。」と何度も何度も引き止めていたので、面会時間が終わるまでの七時間、ずっと一緒に過ごしました。

でも面会した四日後には、もううまく話せなくなっていると聞きました。その連絡があった三日後に会いに行くと、本当にもう何を言っているのかも聞き取りにくくなっていました。一週間前とは変わり果て、さらに衰弱した姿。床ずれで身体も痛そうで、何度も何度も痰が絡んで苦しそうな姿。延命治療はしないといっても、痰ぐらい吸引してくれればいいのに、それはしないと聞き、治療をしないという選択が、こんなに苦しいのかと胸が張り裂けそうでした。

すると急に祖父が、ほんのわずかな体力で、

「ぶどうが食べたい。」「パイナップルが食べたい。」と言い出しました。どんなに小さくしても、飲み込む力さえほとんどない祖父に、食べさせるのは危険だからと言っても、祖父は何度も食べたいと言いつけました。

そんな祖父の様子に、父は「俺の責任で食べさせる。」と言い出しました。私が止めてもパイナップルを小さくして祖父の口に運びました。そして母も、ぶどうのゼリーを小さく砕いて口に運びました。私は、喉に詰まらせて死んでしまうのではないかと、怖くて仕方がなかったのですが、ただ見守るしか出来ませんでした。食べている祖父は満足そうな、でも小さくて少し不満そうな様子でした。でも無事食べ終わった時にやっと、祖父の「願い」を少しでも叶えられたと感じました。

面会時間の終わりが来て、帰ろうとした時、祖父は私や妹の手を握ろうと、ゆっくりと手を差し出してきました。妹の手を握り、私の手も握り、じっと見つめていました。こみ上げてくる泣きそうな気持ちを我慢して、ぎゅっと手を握りしめ、「また絶対会いに行くからな。」と言って病室を出ました。

その時、突然ドーンと大きな音がしました。外を見ると大きな花火が上がっていました。看護師さん達はそれに気づき、面会時間が過ぎているにも関わらず、祖父の部屋の窓を開け、ベッドの位置を動かし、祖父と一緒に花火を見せてくれました。十五分間、みんなで花火を見て、「きれいやなあ。昔みんなで花火大会に行ったなあ。」と思い出話をしました。

それが祖父との最後の面会、会話になりました。祖父は、翌日には全く話せなくなり、日付が変わってすぐ、息を引き取りました。

祖父が緩和ケアを選択したのは、最期まで自分らしく自由に生きたいと願ったからだと思います。私は、祖父の闘病生活から周りの人達が、その思いをサポートしてあげる事が、その人の人権につながるのではないかと思います。人の最後の選択に正解はなく、出来る限りの希望を明日へと繋いで行くことが大切なのではないかと思います。病院では、祖父の意思を尊重し、家族の思いや希望にも向き合っていただき、最後まで寄り添っていただきました。

人が人らしく生きること。私も私らしく、精一杯毎日を生きて、祖父のように自分の意思をしっかり持った人になりたいと思いました。そして、祖父には、私の精一杯生きて頑張る姿を空からずっと見守っていてほしいと願っています。